草加八潮地域連携呼吸器研究会（SYRC-R:シルク・アール）

事務局：草加八潮医師会

〒340-0018 草加市中央1-5-22
TEL 048-928-8760
FAX 048-924-7180

代表世話人・会計：高木　寛
（高木クリニック）
世話人：加藤　貴紀
（かとうファミリークリニック）
平田　大介
（草加八潮医師会学術担当理事・平田クリニック）
広報・編集：　新　謙一
（草加内科呼吸ケアクリニック・前東京医科歯科大学臨床教授）
看護・介護部門世話人
花木　美穂子
（わーくわっく草加）
須鴨　義夫
（一正堂薬局第二支店）
村瀬　妙子
（訪問看護ステーション氷川）
内田　由美子
（ケアステーションかしの木）
高橋　克幸
（獨協医科大学越谷病院リハビリテーション部）
新　智美
（草加内科呼吸ケアクリニック）
監査：草加八潮医師会事務局
会報著作・製作：新　謙一

シルク・アール：質の高い滑らかな地域連携に！

草加八潮地域連携呼吸器研究会（英名：Soka-Yashio Regional Conference of Respiratory Disease）は頭文字をとりSYRC-Rと表記し、「シルク・アール」と発音します。絹（シルク）の様に質の高い滑らかな連携がある（アール）ことを目指しての語呂合わせのネーミングです。
名前負けしないように継続発展させていきたいと考えています。
皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

SYRC-Rは草加八潮の周辺地域からのご参加も歓迎致します

訪問看護ステーション氷川の村瀬さん、お疲れ様でした

訪問看護ステーション氷川の閉鎖に伴い、長らく草加および埼玉東部の訪問看護師をリードしてくださった村瀬妙子さんが7月末をもって退職されます。在宅診療をしている医師からの信頼も厚く、なによりも利用者さんから寄せられる絶大な信頼は彼女の情熱と確かな技量を証明するものです。当SYRC-Rに頂いた様々なご助言も大変貴重でした。今後も後進の指導のなかで「村瀬スピリッツ」を広めて頂ける事でしょう。本当にありがとうございました。

編集後記

今回は東日本大震災という戦後最大の困難にある状況で「看取り」を考えてみました。家族や地域の絆が私達の生活にいかに大きな影響を与えていたのか、それを失ったり活用したりして初めて実感したのが今回の震災だったのではないでしょうか？首都圏にも30年以内に震災が生じることは想定されていますし、人口減少＆高齢化という静かな危機が進行中であることも我々は知っています。
顔の見える関係は、地域での絆を強くします。絆が強ければ来るべき困難に英知を結集でき、コミュニティを壊さずに私達の生活を保つことができるでしょう。

第5巻　第1号　発行日2011年6月29日

草加八潮地域連携呼吸器研究会（SYRC-R）

ハイライト：

高齢化社会を迎え、「多死」の時代に入りました。医療資源が従来のように右肩上がりに拡充されることが全く期待できない現状で、行き場を失った余命短い患者さんが身近に溢れるのではないかと危惧されます。あるアンケートでは、余命1-2ヶ月になったら自宅で余生を過ごしたい方が8割に達するにもかかわらず、実際には無理だろうと諦めている方が大多数である現状が浮き彫りにされました。この地域でも在宅看取りを考えることは極めて重要な課題になっています。「地域が大きなホスピタル」として機能するためにも、みんなで看取りについて考えてみませんか!

目次：

ごあいさつ　p1
第51回日本呼吸器学会が東京で開催され、SYRC-Rのデータを発表　p2
雑誌MPの3月号でCOPD連携のコツを執筆　p2
講演：緩和ケアの実践：聖路加国際病院　林　章敏先生　p3
パネルディスカッション
草加八潮地域の看取りを考える　p3
訪問看護ステーション氷川の村瀬さん、お疲れ様でした。ありがとうございました。　p4

「良く死ぬことは、良く生きること」

篠原　浩一

八潮中央総合病院
診療部長
緩和ケア担当

医療法人社団協友会　八潮中央総合病院
Yashio Central General Hospital

当院には、単に医学的な必要性だけでなくさまざまな事情を抱えた患者さんが入院されます。入院のご希望にはできるだけ応えるようにしていますが、その一方でいつも考える事があります。果たして入院をお受けする事が本当にその患者さんのためになるのだろうか。自宅で過ごすことはできないのだろうか。当院よりもっと適切な療養環境の施設はないだろうか、家族の通院は大丈夫だろうか。「入院させて下さい」という言葉の前に、「本当はうちで過ごしたいのだけれど」が隠れていないかどうか。

入院された後も、在宅可能かどうかを検討します。実際に在宅をお勧めする場合、いくつかの障壁があります。本人や家族の事情、心理的抵抗が大部分を占めるのですが、在宅を受け入れる往診医、訪問看護などのリソースが少ないことが原因のひとつとなることもあります。多くの専門職が関わることになるのですが、その患者さんのことだけでなく治療や療養についての一般的な共通認識を形成する場も必要ではないかと感じています。私自身も、病院で働いていると病院内の思考になり、つい在宅という選択肢の閾値を高く考えてしまいがちです。

以前訪問診療をしていたときに、半ば強制的に（もちろん体制を整えた上で）在宅医療に移行した方でもほとんどの方が「大変でしたが、とてもよかったです」とおっしゃってくださいました。「良く死ぬこと」は、裏返せば「良く生きること」でもあります。生活の場であり自分の居場所である自宅で死ぬということは、生を自分のもの、家族のものとして全う出来ることにつながるのではないかと思います。

SYRC-R は、この地域の多職種連携のよき装置のひとつとなっているのではないでしょうか。そのような意味で、今後 SYRC-R に参加させていただくことを大変楽しみにしています。

一人の患者を支えるためには、病院内のスタッフだけで完結させることはできません。地域全体の連携が必要です。「地域全体をホスピタルに」という SYRC-R の考え方は、まさに全ての医療に必要なことだと思います。この地域での私達の役割をたえず考えていきたいと思います。

認定証
Certificate of Accreditation
認定第JC680-2号
Accreditation Number
審査体制区分3
(ver.6.0)
Assessment system division 3
病院名 Hospital Name　医療法人社団協友会 八潮中央総合病院 殿
Yashio Central General Hospital
貴病院が日本医療機能評価機構の定める認定基準を達成していることを証する
This is to certify that the above hospital has demonstrated satisfactory compliance with the applicable JCQHC accreditation standards.
認定期間：2010年9月29日～2015年9月29日
September 30,2010 September 30,2015
発行日：2010年12月3日
Issue Date : December 3,2010
日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care
理事長　井原　哲夫
Chairman of the Board Tetsuo Ihara

八潮中央総合病院は草加八潮管内で「唯一」の医療機能評価認定病院で、審査が厳しいversion6を受審し、昨年更新が認められました。

第51回 日本呼吸器学会学術講演会
The 51st Annual Meeting of The Japanese Respiratory Society

震災後の課題も焦点に 第51回日本呼吸器学会を東京で開催

―呼吸器病学：未来への第一歩―

1904年 青木繁《海の幸》石橋財団石橋美術館蔵（久留米市）

会期:平成23年4月22日(金)･23日(土)
会場:東京国際フォーラム
会長:相澤 久道(久留米大学医学部内科学講座呼吸器･神経･膠原病内科部門 教授)

4月22～23日に開催された第51回日本呼吸器学会は、会長の久留米大学相澤教授の急逝や東日本大震災の余波を受けて会期を通常の3日間から2日間に圧縮して開催されました。SYRC-Rのデータが抄録発表されました。今春、新智美はCOPDを研究課題として大学院修士課程を無事卒業させていただきました。COPDは喫煙関連疾患の早期介入の良いモデルになりうることが最近認知されるようになり学会でもHOTな分野になってます。引続き皆さんのご協力を頂き、COPD患者さん管理の更なる充実を目指したいと考えています。

COPD地連携パスで交流を図っている石巻赤十字病院の矢内先生から被災地の基幹病院の立場からご発表があり、過去に臨海工場が流して堆積した海底のヘドロが津波で町を覆い、呼吸器系の病気が懸念されるそうです

草加八潮地域連携呼吸器研究会(SYRC-R:シルク・アール)
3年間のCT肺気腫以上のCOPD164例に関するCATの分析

草加内科呼吸ケアクリニック　新　智美ほか

2007年度から開始したCOPD　地域連携クリニカルパス（以下パス）はCOPD患者の早期発見に有用で、大規模研究同様にCOPDの進行だけでなく悪性腫瘍や心疾患の併発も視野に入れた喫煙関連疾患のトータルマネージメントが重要であることが示された。本邦でもパスの運用は次第に増えているが登録症例の日常を追跡管理した報告は少ない。我々はパス登録症例で定常状態のCOPD患者の日常を知る目的で、CT肺気腫以上の189例に対し全例に診察および電話での聞き取りとCOPDアセスメントテスト（CAT）を実施した。評価可能症例は189例中164例（CT肺気腫16例、GOLDのⅠ期28例、Ⅱ期44例、Ⅲ期29例、Ⅳ期4例）で喫煙継続者は10例でCT肺気腫が5例で最も多く、介入により禁煙した症例は46例で、現状評価にて禁煙継続は43例（93.5%）だった。CATスコアの平均はCT肺気腫3.1、GOLDのⅠ期3.7、Ⅱ期6.8、Ⅲ期9.4、Ⅳ期16.5だった。CATスコアは病期に応じて増加した。併存症はCOPDの病期とは関係なく発症しており、パスを運用して重大な疾病の早期発見を含めた患者介入を維持することで、長期的な予後を変えうるのか継続検討が必要である。

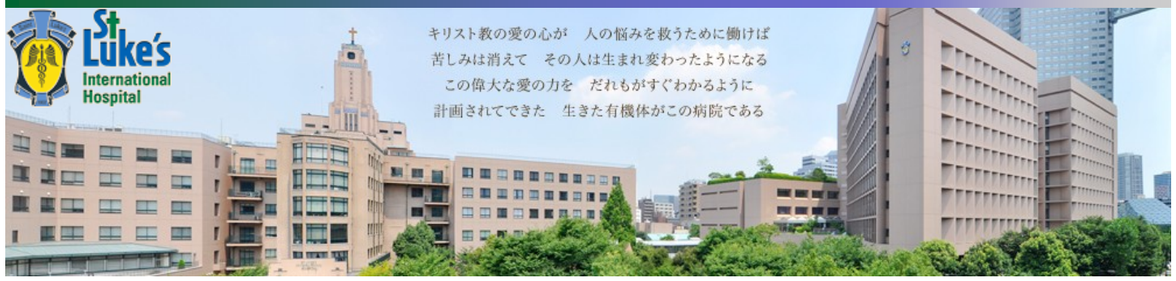
お願い：
「今月」もSYRC-RのCOPD連携患者さんから肺癌が発見されました。
以前から癌が高率に発生しやすいことを説明していたので、前向きに治療に取り組んで頂けるお言葉を患者さんから頂戴しました。私達でできるサポートは惜しまないことも同時にお約束しました。
皆さんの周囲にタバコを吸っている（いた）中高年の方はいませんか？いらしたら近所の先生に「COPDが心配」と告げて、スパイロとCTなど適切な経年管理をして貰うよう勧めて下さい。

雑誌「MP」の３月号でCOPD地域連携のコツを執筆

産業医科大学の迎（むかい）寛教授、霧が丘つだ病院の津田徹院長よりご依頼を頂戴し、SYRC-RでのCOPD連携診療の現状および連携を取り持つコーディネーターとして看護師の役割が重要であることを草加内科呼吸ケアクリニックの新謙一が分担執筆しました。

COPDの実地診療について本邦の第一人者の先生方が分担執筆されていますので、興味のある方はご一読ください。

講演：　ターミナルケアの実践：癌に限らず呼吸症状を呈する患者の地域での看取りもふまえて　聖路加国際病院緩和ケア科医長　林　章敏　先生



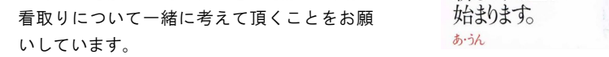
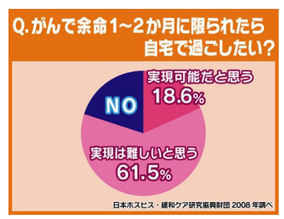
その人らしく生きる

今回は、医療界のカリスマ日野原重明先生に請われて聖路加国際病院緩和ケア科を率いる林章敏先生をお招きしました。林先生は3500 名の方の看取りを通して、日頃治療に明け暮れる患者さんの薬では癒えない痛みを理解し、病気とうまく付き合い「その人らしく生きる」ことを支える医療を一貫して追求してこられました。

しかし一定人口当たりの緩和ケア病床は埼玉県は全国最少で、最多の高知県に対し 1/19しかありません。今回はパネルディスカッションにも加わっていただき、私達の地域の看取りについて一緒に考えて頂くことをお願いしています。

「情熱大陸」のHPより
（2007年3月25日放映）

パネルディスカッション：草加八潮地域の看取りを考える
～看取りに生かそう、多職種連携の実践～

癌で余命1-2ヶ月に限られたら自宅で過ごしたいか？の問いに8割の方はYESと答えたものの、実際に実現可能と考えている方は限定的であるとのデータがあります（右図）。そこで当地における看取りに関わるヘルスケアスタッフの状況を知る目的で昨年ターミナル期介入を3件以上経験した事業所で了承が得られた全ての施設に伺い、直接訪問面接法で「看取りについての考えと、ヘルスケアの各職種の介入時期とその役割について」意見を伺い集計しました（別刷り参照）。

パネラーは、特別講演の林先生、林先生と高校の同窓で当地で唯一緩和医療を提供している八潮中央総合病院の篠原浩一先生、地域で24時間対応型訪問看護を提供しているケアステーションかしの木から内田由美子さん、八潮市の多職種連携組織である「やしお介護サービス事業者連絡会」から在田創一さん（杜の家やしお、社会福祉士）、多数の癌治療患者さんを抱える草加市立病院の緩和ケア認定看護師の矢部浩美さんです。司会は草加市出身で篠原先生と同じ自治医大ご卒業の平田クリニックの平田大介先生です。総括は林先生と大学が同窓の新謙一が担当します。